

ガリフナの歴史 その1 カリブ海小アンティル諸島の先住民とヨーロッパ列強

History of Garifuna No.1

Indigenous People and European Countries on the Lesser Islands of Caribbean Area

富田 晃*
Akira TOMITA*

要 旨

国連ユネスコは、2001年、第一回の「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」(通称：世界無形文化遺産)に「ガリフナの言語、舞踏および音楽」を登録した。ガリフナとは、1797年に、カリブ海小アンティル諸島のセント・ヴィンセントから中米ホンジュラス沖のロアタン島に追放された人たちの子孫である。本稿では、ガリフナの歴史のうち、カリブ海小アンティル諸島への人類進出から、コロンブスの時代を経て、イギリスとフランスが進出してくる17世紀までの状況を記述する。

1. ガリフナの概略

1797年4月12日。8隻のイギリス船が中央アメリカのホンジュラス沖にあるロアタン島に到着し、2000人ほどの人々を置き去りにした。ガリフナとは、このとき、カリブ海小アンティル諸島のセント・ヴィンセントからロアタン島に追放された人たちとその子孫である。ホンジュラスを中心に、ベリーズ、グアテマラといった中米諸国のカリブ海岸に点々と集落を形成するとともに、ニューヨークなどのアメリカ合衆国への移民も多い。黒人的形質特徴をもつ一方、言語や伝統的な生業の形態などは、カリブ海小アンティル諸島の先住民との関わりが大きい。シャーマニズムと祖先崇拜とが一体化した独自の宗教体系を形成するとともに、

太鼓とマラカスを中心にした、さまざまな音楽があり、各種祭礼は音楽と踊りとともに行われる。国連ユネスコは、2001年、第一回の「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」(通称：世界無形文化遺産)に「ガリフナの言語、舞踏および音楽」を登録した。

2. 先住民の世界



ホモ・サピエンスの拡散



人類の移動とガリフナの形成

現生人類(ホモ・サピエンス)は、今から約20万年前にアフリカで生まれ、6万年前になるとアフリカ大陸を出てユーラシア大陸に入った。約1万5000年前に、陸続きであったベーリング海峡を渡り北アメリカ大陸に入り、約1万2000年前になると南アメリカ大陸に到達した。

* 弘前大学教育学部美術教育講座
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

南北アメリカ大陸では、紀元前5000年頃、トウモロコシなどによる農耕がおこなわれるようになり、アステカ、マヤ、インカといった文明へと発展していった。一方、南アメリカ大陸東部アマゾン川～オリノコ川の流域に移り住んだ人たちは、それまでの狩猟採集に加え、1万年前頃、キャッサバ芋 cassavaⁱの栽培をはじめた。キャッサバ芋には有毒種があり、芋をすり潰して水分を抜きせんべい状に焼き上げる毒抜き法が生まれた。木やヤシで家屋をつくり、ハンモックを編んでそれに寝た。また、木の実の殻に種をいれてマラカスをつくったり、タバコを栽培しそれを吸ったりした。各村には祖先霊や精霊たちと交信するシャーマンがいて、タバコを用いて病気を治し、マラカスで唄や踊りを率いて祭礼を司った。

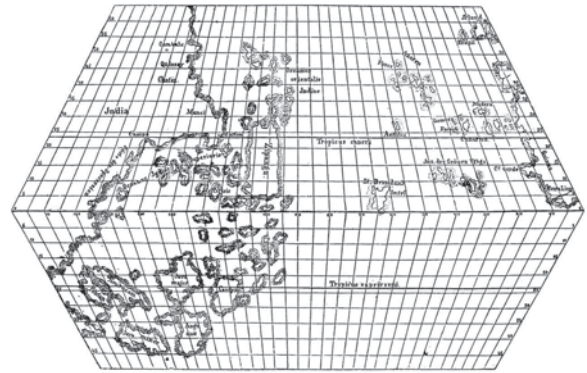
紀元前後になると、こうした南米大陸のモンゴロイドの中からアラワク人 arawakⁱⁱがカリブ海の島々に移り住むようになった。キャッサバ農耕を主とする農耕民族的なアラワク人は、オリノコ川の河口からカヌーによってカリブ海南東の小アンティル諸島に移り住み、次第に北西の大アンティル諸島へと移り住んでいった。

西暦1400年頃になると、同じくオリノコ川流域からカヌーの扱いと戦闘に長けたカリブ人 carib, caraib, charaib, kalinago, kalifouna, galibi etc.ⁱⁱⁱが、アラワク人を北の島々へと追いやりながらカリブ海小アンティル諸島に移り住んできた。カリブ人は、キャッサバ農耕もしたが、川や海で魚を捕る漁労民族としての性格がつよく、移動性の高い小規模な集団で暮らした。カリブ人の男性は戦闘集団をつくってアラワク人の村々を襲い、アラワク人の女性を奪って妻とした。カリブ人の男性は、複数の妻をもつことが多かった。カリブ人の妻となった元アラワク人の女性はキャッサバ農耕や子育てをし、その子はカリブ人としてみなされた。

かくして、カリブ人としての自己認識をもち、戦闘的で漁労民族的なカリブ人の特性をもちながらも、言語や農耕文化はアラワク人の特色を強く残す民族集団が、カリブ海小アンティル諸島に形成されたのである。20世紀の人類学者は、彼らをアイランド・カリブと呼んだ。

3. コロンブスとヨーロッパ

中世のヨーロッパでは、世界は平板で、海の向こうには滝があり、そこまでいくと奈落に落ちると考えられていた。15世紀になりイタリアを中心にルネサンスの花が開くと、羅針盤の発明により陸地から離れた遠



コロンブスが携行したトスカネリの地図（後世の贋作という説もある）
現在のキューバ島あたりに大きくジパング（日本）が描かれている。

洋航海が技術的に可能になった。

そうした中、1474年、イタリアの天文学者トスカネリ Toscanelli^{iv}は、ポルトガル、リスボンの大司教に書簡を送り、大西洋を西へ西へと行けばインドやアジアに着くはずだという地球球体説を説くのがだった。当時のイタリアは地中海貿易で潤っており、トスカネリの説への関心は低かった。

その頃のヨーロッパでは、東南アジアで生産される香辛料、特に肉の保存に欠かせないコショウへの需要が高まっていた。しかし、東南アジアで産出される香辛料を、ヨーロッパ人が手にいれるためには、イスラム商人から買うしかなく、コショウの値段は、同じ重さの金と交換されるほど高価であった。また、アジア諸国の東端にはマルコ・ポーロ Marco Polo 1254-1324^vが『東方見聞録』で伝えた黄金の国ジパング（日本）があるはずだった。ただし、海の果てには奈落があるとされていた当時、大洋の向こうを目指すには並はずれた勇気が必要だったし、探検隊を組織するには国家予算規模の資金がかかった。トスカネリの地球球体説を知った一人の野心家が動き出した。ポルトガルで、海図の製作や航海士をしていたイタリア出身のクリストファー・コロンブス Christopher Columbus / Cristoforo Colombo / Cristóbal Colón 1451頃-1506^{vi}が、大西洋を西へと渡りインドやアジアへと向かう航海を計画し、支援者を捜すのがだった。

1488年、ポルトガルのバルトロメウ・ディアス Bartolomeu Dias 1450-1500^{vii}が、大西洋をアフリカ大陸に沿って南下して喜望峰を発見した。こうして、ポルトガルは、東周りでインドやアジアへとつづく航路を開拓した。

この話を聞いたスペインのイサベル女王 Isabel I^{viii}は、ポルトガルとは別にインド航路を手に入れようと、コ

ロンブスへの支援を決めるのだった。

その頃、カトリック国スペインは、イスラム勢力下にあったイベリア半島を取り戻すレコンキスタ（国土回復運動）Reconquista 718-1492^{ix}の最終局面に入っていた。つまりスペインによるコロンブス支援は、東南アジアの香辛料やジパングの金を求める経済活動であったとともに、イベリア半島からイスラム教徒を駆逐しつつあったカトリック勢力が新たな布教先を求める宗教運動でもあったのだ。

こうして、1492年、スペインのイサベル女王の命を受けたコロンブスが、大西洋を西へ西へと向かう大航海に出た。コロンブスは、トスカネリが制作した地図を手にいれ、それを携行した。トスカネリは、実際よりも地球を小さく計算し、彼が作った地図では現在のキューバあたりにジパング（日本）が描かれていた。

コロンブスが第一次航海で到達したのは、カリブ海の西部、キューバ島とその周辺の島々だった。コロンブスは、これらの島々で、アラワク人と出会った、そしてアラワク人たちが、東方から攻めてくる別な部族にひどく怯えていることを知るのだった。

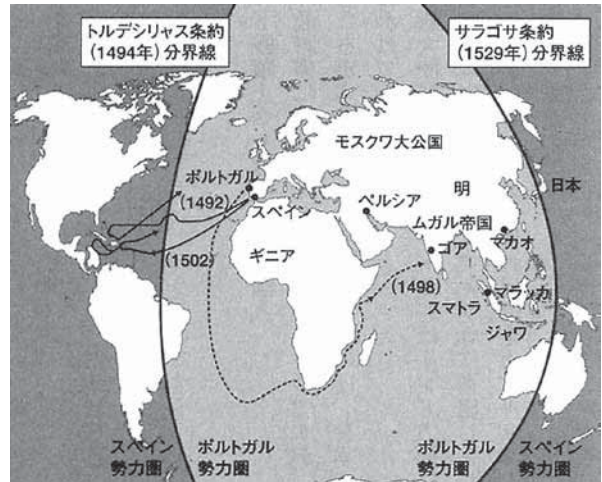


コロンブス第一回航海 1492年8月3日-1493年3月15日

4. 17世紀の小アンティル諸島

ヨーロッパは、コロンブスの航海によって大西洋の西の果てに未知の世界が広がっていることを知った。この地は、インディアス、西インド、新世界、新大陸、アンティーリヤス、アメリカなどと呼ばれるようになっていった。

スペインはライバル国ポルトガルと、その後の領土獲得で無用な争いをしないで世界を二分できるようにとトルデシーヤス条約を結んだ。この条約によって、ポルトガルは当時進出しつつあったアフリカ、インド方面に加え、ブラジルを領土とし、それ以外の新世界をスペインが独占することになった。



スペインとポルトガルによる世界の分割

スペインによる新世界進出は、まず、イスパニョーラ島、キューバ島などのカリブ海諸島の西部、大アンティル諸島からはじまった。黄金を求めたスペインは、先住のアラクク人を捕まえて奴隷にし、金の発掘などをさせて酷使した。アラワク人は、スペイン人による殺戮、奴隷としての重労働、そして、旧大陸からもちこまれたコレラや天然痘などの疫病により一気に激減した。スペイン人は、死滅していくアラワク人のかわりに、アフリカから黒人奴隷を連れてくるようになった。

イスパニョーラ島に新世界進出の拠点をおいたスペインは、さらに西にある南北アメリカ大陸へと征服隊を送った。1521年、コルテスがメキシコのアステカ帝国を、1533年にはピサロが南米大陸山間部のインカ帝国を征服し、戦利品として膨大な金銀を持ち帰った。こうしてスペインの関心の中心は、カリブ海の島々から大陸部に移っていった。そして、カリブ海域にはイギリスやフランスなどの海賊が出没し、金銀財宝を運ぶスペイン船を襲うようになった。一方、カリブ海諸島東部の小アンティル諸島は「人食い人種」の住むところとして恐れられ、放置されるのであった。

十字軍によって11世紀にヨーロッパ世界にもちこまれた砂糖は、ヨーロッパ人を魅了した。砂糖の生産には、気候や土壌の条件に加え、収穫期の刈り取りや搾汁に大量の労働力が必要であった。ブラジルを新たな領土として手に入れたポルトガルは、アフリカから黒人奴隷を移入して砂糖を生産し、それをヨーロッパで販売して利益を得る道を開いた。17世紀になり、同じく熱帯地方で生産されるコーヒー、紅茶、カカオ（ココア/チョコレート）が、ヨーロッパ社会に普及する



セント・ヴィンセント島とカリブ海小アンティル諸島

と、ヨーロッパでの砂糖の需要は一気に高まった。こうしてカリブ海の島々に、大規模な砂糖プランテーションがつくられるようになり、そこでの労働力として、大量の黒人奴隷がアフリカから移入されるようになったのだ。

1588年、イギリス海軍がスペインの無敵艦隊を敗り、それまでのスペインによる海上覇権に陰りが見えるようになった。17世紀になると、ヨーロッパの新たな列強諸国、オランダ、イギリス、フランスが、スペインによる新世界の独占的支配に挑んできた。大アンティル諸島では、イギリスがジャマイカを奪い、フランスがイスパニョーラ島の西側に侵攻して植民地サン・ドマング（ハイチ）を建設した。

セント・ヴィンセント島を含む小アンティル諸島には、イギリスとフランスが争いを繰り返しながら進出してきた。そして小アンティル諸島のカリブ人は、こうしたヨーロッパからの侵入者に激しく抵抗したのである。

フランスはマルチニック島やグアドループ島に進出した。マルチニック島では、フランス人植民者とカリブ人の長年にわたる抗争の末、1658年、フランス軍が武力をもって島の全てのカリブ人を虐殺した。グアドループ島でも、カリブ人はフランス人植民者に強く抵抗し、戦いは泥沼化した。また逃亡奴隷が、カリブ人集落に逃げ込むようになり、彼らの存在が、フランス人植民者の恐怖となっていった。

イギリスは、バルバドス島を拠点として小アンティル諸島の覇権を狙った。1624年、無人島⁸だったバルバドス島に進出したイギリスは、1640年に大量の黒人奴隷を導入した大規模な砂糖プランテーションをこの島に建設した。

例えば、セント・ルシア島は、イギリス、フランス

の間で14回も領有権が入れ替わるほど、小アンティル諸島の各島では領有権をめぐる両国間の抗争が絶え間なかった。こうしたなか、イギリスとフランスは、1660年、カリブ人が住むセント・ヴィンセント島とドミニカ島の二島を両国の中立地帯とし、植民活動をしてない取り決めをした。グアドループ島でカリブ人の抵抗に手をこまねいたフランス人は、島のカリブ人をドミニカ島へと追放した。正式にはヨーロッパ諸国から放棄されたはずのドミニカ島であったが、無法者のヨーロッパ人がやってきて、この島に住み、森林を伐採して周囲の島で売るのであった。こうしたなか、1674年、ドミニカ島のカリブ人とヨーロッパ人居住者との間で衝突があり、大量のカリブ人が虐殺された。このように小アンティル諸島のそれぞれの島で、カリブ人はヨーロッパ人と激しく戦った。またカリブ人に好戦的性格をみたイギリスやフランスの軍隊がカリブ人を傭兵として雇うこともあった。結局、カリブ海諸島のカリブ人は、ほとんどが死滅することとなり^{xi}、現在まで生き残っているのは、ドミニカ島とセント・ヴィンセント島に残ったごく少数の末裔と、セント・ヴィンセント島で黒人と混血し、その後、中米のホンジュラスへと追放されたガリフナのみとなった。彼らは、ヨーロッパ人がセント・ヴィンセントと名付けた島をジュールメイと呼んでいた。

文献

GONZALEZ, Nancie *Sojourners of the Caribbean*, Univ. of Illinois P.1988

MARSHALL, Bernard "The Black Caribs : Native Resistance to British Penetration Into the Windward Side of St. Vincent 1763-1773". *Caribbean Quarterly*, Vol. 19, No.4 1973

PHILLIPS, Krawczak, Christine "Causes and consequences of migration to the Caribbean Islands and Central America: an evolutionary success story", *Causes and Consequences of Human Migration: An Evolutionary Perspective*, Michael H. Crawford (Ed.), Univ. of Cambridge P., 2012

ROCHEFORT, Charles *The History of the Caribby-Islands*, (Trans. Davies, John), T. Dring and J. Starkey, 1666

SWEENEY, James L. "Caribs, Maroons, Jacobins, Brigands, and Sugar Barons: The Last Stand of the Black Caribs on St. Vincent", *African Diaspora Archaeology Network*, 2007

TAYLOR, Christopher *The Black Carib Wars: Freedom, Survival, and the Making of the Garifuna*, Signal Books, 2012

TAYLOR, Douglas *The Black Carib of British Honduras*, Wenner-Gren Foundation for Anthropology Research, 1951

青木康征『完訳 コロンブス航海誌』平凡社 1993

ⁱ キャッサバ cassava マニオク manioc、ユカ yuca ともいう。南アメリカ大陸東部の熱帯地方を原産とするトウダイグサ科のやや木本性の植物。地下にいもを形成する食用作物。現在は広く世界の熱帯域で栽培される。和名はイモノキ。マニオク、タピオカとも呼ばれ、ガリフナ語ではエレバである。

ⁱⁱ アラワク人 arawak アラワク系言語を話す人々の総称。カリブ海諸島、南アメリカ大陸東部に広く分布し100以上の諸部族からなる。

ⁱⁱⁱ カリブ人 carib, caraib, charaib, kalinago, kalifouna, galibi etc. カリブ系言語を話す人々の総称。ただし、ガリフナ（アイランド・カリブ、ブラック・カリブ）の言語は、アラワク語属である。カリブ海小アンティル諸島、南アメリカ大陸北東部に分布し、40ほどの諸部族からなる。

^{iv} トスカネリ Paolo dal Pozzo Toscanelli 1397-1482
イタリア・フィレンツェの地理学者・数学者・天文学者。1474年、西回りでアジアに行く計画をつづった手紙と地図をリスボンの司教に送り、その写しをコロンブスが手に入れた。コロンブスが新世界をアジアだと誤解したのは、トスカネリが実際より地球を小さく見積もったことに起因している。

^v マルコ・ポーロ Marco Polo 1254-1324
イタリア・ベネチアの商人、冒険家。父・叔父と共に1271年から24年間、アジア各地を旅した。日本では『東方見聞録』と呼ばれる『世界の記述』La Description du Monde は、獄中で知り合ったルスティケロ・ダ・ピサがマルコ・ポーロの口述を編纂したものである。マルコ・ポーロは、日本にはいっていない。『東方見聞録』での日本に関する記述は、マルコ・ポーロが中国で見聞きした話である。黄金の

国ジパングの「宮殿や民家は黄金でできている」という話は、中尊寺金色堂に関する伝聞だと思われる。

^{vi} クリストファー・コロンブス Christopher Columbus/Cristoforo Colombo/Cristóbal Colón 1451頃 -1506

イタリア・ジェノヴァ出身（異説あり）の冒険家・航海者。1478年から海図作成に従事。トスカネリの影響を受け、スペイン女王イザベラの援助により、大西洋を西航してアジアに向かう航海に出た。1492年10月11日、キリスト教世界の人間としてはじめてカリブ海諸島に到達した。新世界への航海を4回行った。コロンブスは死ぬまで自分はインド（アジア）に到達したと主張した。

^{vii} バルトロメウ・ディアス Bartolomeu Dias, 1450-1500

ポルトガルの航海者。1488年、ヨーロッパ人として初めてアフリカ大陸の南端、喜望峰に到達し、インド航路を開いた。

^{viii} イサベル1世 Isabel I 1451-1504

カスティーリャ王国の女王。在位1474～1504。アラゴンの王子フェルナンドと結婚しスペイン統一の基礎をつくった。また、コロンブスの航海を支援した。

^{ix} レコンキスタ Reconquista 718-1492

キリスト教国が、イスラム勢力からイベリア半島を再征服する活動の総称。1492年のグラナダ陥落で終わる。

^x 1500年、スペイン人がバルバドス島にいた全ての先住民を捕獲しイスパニョーラ島で奴隷として働かせた。

^{xi} 南アメリカ大陸のアマゾン～アラワク川流域には、現在もカリブ系やアラワク系の先住民がいる。

(2016. 1.12 受理)